

— 開館 30 周年記念・東京富士美術館所蔵 —

中国陶磁名品展

Masterpieces of Chinese Ceramics from the Collection of the Tokyo Fuji Art Museum



展示風景（2012 年 9 月 兵庫陶芸美術館）

【東京富士美術館所蔵 中国陶磁名品展について】

世界四大文明の一つ、黄河文明の発祥の地である中国では、約 1 万年前に「やきもの」が誕生し、優れた造形美と高い技術によって、世界の陶磁器をリードしてきました。

新石器時代の彩陶や灰陶などに始まり、紀元前 15 世紀頃の商時代にはいち早く灰釉陶器が生み出されました。その後、前漢時代（紀元前 3～紀元後 1 世紀）には鉛釉陶器が盛んに作られ、後漢時代（1～3 世紀）には青磁が誕生しました。唐時代（7～10 世紀）になると東西交易が盛んになり、唐三彩のような国際性豊かなスタイルが生み出されました。宋時代（10～13 世紀）になると、青磁・白磁は完成度を増し、北部の金では掻き落としや上絵付による器面装飾が始まりました。元時代（13～14 世紀）には青花磁器が生み出され、明時代（14～17 世紀）には色鮮やかな五彩磁器が開花しました。さらに、清時代（17～20 世紀）にはより鮮やかな色彩の粉彩磁器が開発されました。

東京富士美術館の中国陶磁は、新石器時代から清時代にいたる 4500 年の中国陶磁史が俯瞰できる作品群で構成されていますが、本展では、各時代の主要な作品の中から厳選した、重要美術品 2 点を含む 125 点の名品を公開します。

本展は当館所蔵の中国陶磁器の白眉をまとめて紹介する館外初の展覧会として当館が企画協力し 2012 年 9 月に日本六古窯の一つである丹波の地に立地する兵庫陶芸美術館で開催された「日中国交正常化 40 周年記念 東京富士美術館所蔵中国陶磁名品展」がご好評をいただき、その里帰り展として開催するものです。この展覧会を通して多くの方々が中国陶磁への関心と理解を深められ、その作品を生み出した豊潤な美の精神にふれていただくことを念願してやみません。

展覧会の特徴：

(1) 2012 年 9 月、国内有数の中国陶磁コレクションである当館のコレクションを初めてまとめて紹介し、好評を博した兵庫陶芸美術館での展示の里帰り展

(2) 新石器時代から清時代まで中国陶磁史を通観できる展覧会

当館の中国陶磁は、新石器時代から清時代にいたる 4500 年の中国陶磁を網羅しています。本展では、各時代の主だった作品の中から厳選した 125 点を展示します。

(3) 開館 30 周年記念展覧会の一つとして当館コレクションの中で一分野を占める中国陶磁を一同に展示する貴重な機会です。

兵庫陶芸美術館での開催時 (2012 年 9 月) の反響：

弓場紀知 (ゆば・ただのり、兵庫陶芸美術館副館長)

「宝石のように美しい作品」「他に類例をみないここにしかない 1 点ばかり」

「鑑賞性を主体にした非常にチャームなコレクション」

「世界で最も質の高い唐三彩のコレクション」

「若い人の感覚で中国陶磁を楽しんでもらいたい」

朝日新聞 (丹波・三田) 2012 年 9 月 8 日報道

「4500 年の歴史 125 点ずらり」

読売新聞 (丹波) 2012 年 9 月 14 日報道

「鮮やか、華麗 中国陶磁 125 点」など

【展覧会概要】

展覧会名称： 「開館 30 周年記念・東京富士美術館所蔵 中国陶磁名品展」
英文名称： Masterpieces of Chinese Ceramics from the Collection of the Tokyo Fuji Art Museum

開催期間： 2014 年 1 月 12 日 (日) ～ 3 月 30 日 (日)
休館日： 月曜休館 (祝日の場合は開館。翌日火曜日が振替休館)

開館時間： 10:00～17:00 (16:30 受付終了)

会 場： 東京富士美術館：本館・企画展示室 1～4

主 催： 東京富士美術館

入場料金：大人 800 (700) 円、大高生 500 (400) 円、中小生 200 (100) 円

※新館常設展示室もご覧になれます

※土曜日は中小生無料

※ () 内は前売券、各種割引料金 [20 名以上の団体・65 歳以上の方・当館メルマガ登録者ほか]

※障がい者及び付添者 1 名は半額 [証明書等をご提示下さい]

※誕生日当日にご来館された方はご本人のみ無料

- 展示構成：
- 第1章 黎明期から青磁の誕生まで
 - 第2章 東西文化の融合と華やかな色彩の展開
 - 第3章 青磁・白磁の完成と彩釉の萌芽
 - 第4章 景德鎮窯における色彩と文様の栄華

出品件数：125 件

- 代表作品：
- 1. 三彩貼花宝相華文水注 唐（7－8 世紀）



大きな宝相華文の貼花が器に飾られた水注。地には藍釉が全体に掛かり、宝相華文とともに、豪華な雰囲気を漂わせている。藍釉はコバルトであり、緑釉や褐釉に比べ、希少であり、それがふんだんに使われていることがこの三彩をより豪華にみせている。水注の姿はササン朝風であり、藍釉が加わり、よりエキゾチックな雰囲気を強めている。

- 2. 磁州窯 白地黒掻落牡丹文梅瓶 北宋（11－12 世紀）



全面に塗った白化粧の上に鉄釉を掛け、6 箇所線刻で上向きの大振りな牡丹唐草文を配し、肩部と裾部にはそれぞれ花卉文を線刻する。余白部分は鉄釉を掻き落とし、白地に黒の牡丹文を表す。その後、鉄釉を掻き落と

した部分にさらに白釉を補っている。白地黒掻落の技法は、磁州窯を代表する装飾技法であり、白と黒の対比が明確で美しく、技術力の高さを窺うことのできる作品である。

3. 磁州窯 白地鉄絵牡丹文梅瓶 金一元 (12-13 世紀)



磁州窯における典型的な白地鉄釉の梅瓶である。口がすぼまり緩やかな曲線で形作られた梅瓶に、白化粧を施し、軽快かつ伸びやかな筆致で、牡丹折枝文を描く。類品は、いくつか知られるが、なかでもこの作品は、より、牡丹文が端正で、バランスよく配している。白絵鉄絵の技法は、白い器面に筆で文様を描くために、いきいきとした筆使いが大きな見所となっている。口は後補。底裏に窯印のような線刻がある。

4. 磁州窯系 黒釉堆線文瓶 金 (12-13 世紀)



裾が広がった高台を持ち、胴部は膨らみを持つ。長い頸部からラッパ状に開いた口縁に、切り込みを入れて6つの花卉状になった百合口を持つ瓶である。胴部には、素地に白土の線を連続して貼り付け、その上から黒釉を全体に掛けて、白い筋が浮き上がった文様を生み出している。このような文様は「堆白線文」(ついはいくせんもん)と呼ばれ、金時代に多用された。百合の花に例えられた百合口は、宋時代以降にみられる形である。

5. 景德鎮窯 青花魚藻文酒会壺 元（14世紀）



胴部が大きく張り、頸部が短く直立する酒会壺。口縁には銅の覆輪がかけられている。本来は蓋を伴う。白磁にコバルトを呈色剤とする顔料で文様を施文する青花は、元時代後期の景德鎮窯で始まる。本作品はこのタイプの壺の典型的な文様配置で、口頸部に波濤文、肩部に牡丹唐草文、胴部に魚藻文、四方禪文を挟んで裾部にラマ式蓮弁文が描かれている。イギリスの陶磁研究者、ハリー・ガーナー卿の旧蔵品。

6. 景德鎮窯 五彩魚藻文面盆 明・万暦年間(1573ー1620)



鐏状の口縁部を持つ五花形の面盆で、明時代の万暦期に好まれた形。万暦年間、明時代の景德鎮窯における五彩磁器の全盛期。赤色ばかりでなく、緑・黄・青・黒など、繁褥（はんじょく）ななかにも洗練された色使いが特色。この作品は赤を主調とし、内面は魚藻文が濃密に描かれ、外面に花卉唐草文、八宝文が配されている。底裏には、二重圈線内に3字2行の青花銘。

7. 景德鎮窯 五彩蓮池文方瓶 清・康熙期（17－18 世紀）



やや上部の広がる方形の胴部に、口縁部が外反する口頸部が付く瓶。白磁の器胎に口縁端部と稜線を残して黒で塗り込め、さらに緑釉を塗り重ねて、光沢のある漆黒色の黒色を作り出している。黒地の器面は白い縁取りの画面に仕立てられ、頸部と胴部4面は緑を主体とし、くすんだ赤・黄・紫で蓮池文が描かれている。底裏中央部は四角に彫り込まれ、青花で葉文のマークが描かれている。

【関連イベント】

中国陶磁名品展ギャラリートーク

《中国陶磁名品展》を当館の担当学芸員が楽しくわかりやすくご案内いたします。

開催日：1/18（土）、2/15（土）、3/15（土）[本館・企画展示室にて]

※各日 14 時より約 1 時間。申込不要。無料（ただし展覧会の入場料金が必要、土曜日は中小生無料）

当館学芸員によるギャラリートーク

同時開催の常設展示《ルネサンスから現代まで》と《アンディ・ウォーホル展》を、楽しくわかりやすくご案内いたします。

開催日：1/25（土）、2/1（土）、2/8（土）、2/22（土）、3/1（土）、3/8（土）、3/22（土）、3/29（土）[新館・常設展示室にて]

※各日 14 時より約 1 時間。申込不要。無料（ただし展覧会の入場料金が必要、土曜日は中小生無料）

春休みワークショップ

開催日時：3/23（日）10：30～/14：00～（各回 1 時間半程度）

※詳細は後日 HP にてお知らせ致します。